梅兒誉美 初編 上

207
60
2829

梅こよ美の序

南枝に雪は積頃より一輪づゝ咲梅の匂る
このむすびて願ふ吉方の三鏡宝珠の恵を祈る春
はあしたの賣出しに多願玉女の門出より貪狼星玉
女は利益みなそ袋外題の色摺より天星玉女の
神徳ありて萬客買手来そゝのめき給ふは八将

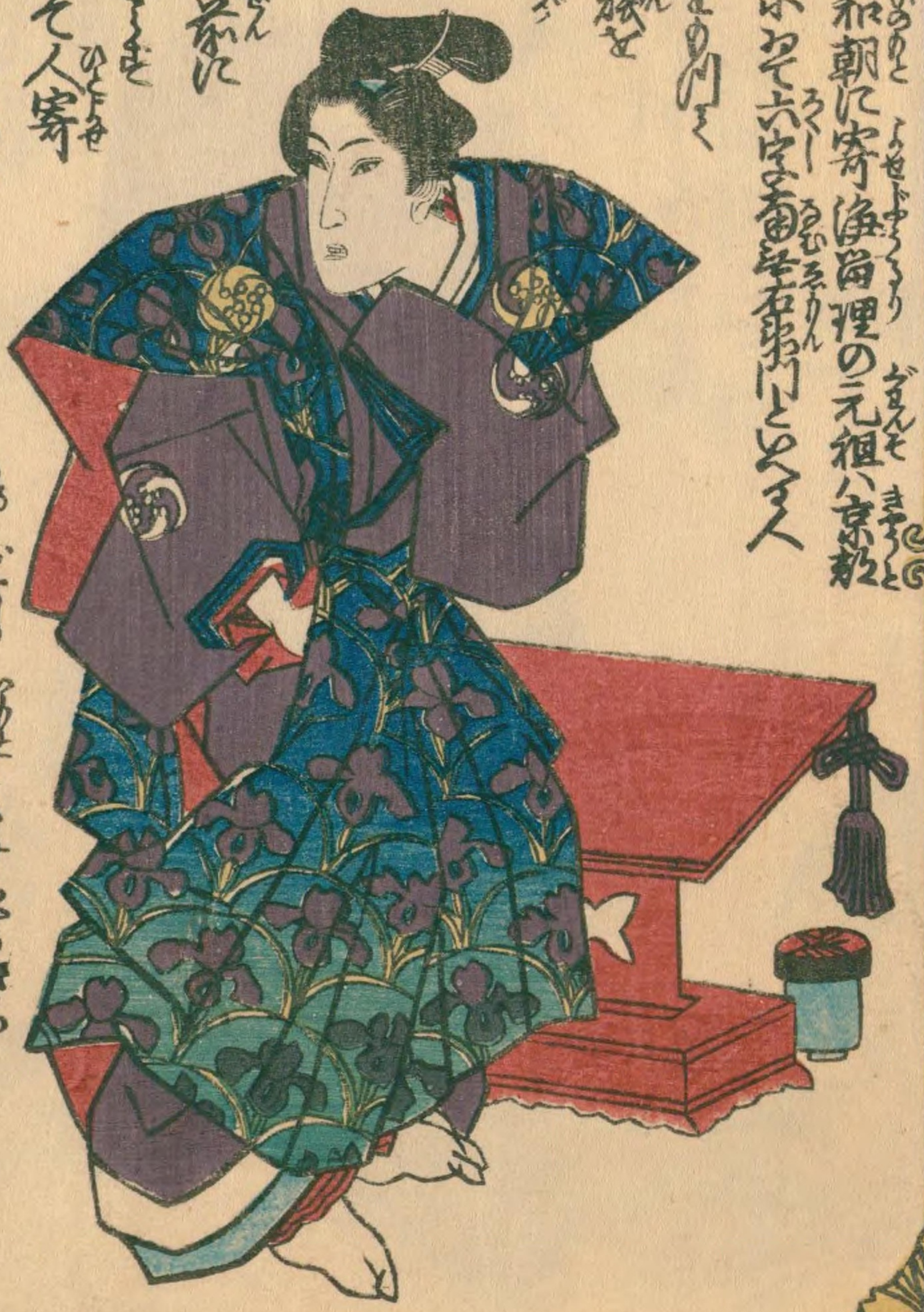
明治三四・一一・八 購求

神の寸経におもむくのを建といひ仕立ても切形よく平を表
紙に押凹ぬく画ざうし除きひやのまて破るは御免の
表紙附立直を定の當用執といえんぎに成納
巻を開の看官に作者が願御評判満と則極えた
蔵入いはふ天恩月徳四季の土用といふも更春夏秋
冬止時なく日々の注文追摺とハチト慾心の十干十二支
土公をおきてそんなる直が出るとへ部数の倡なし諸君
遊行の間の日まさへ出されず此冊子をもておびく梅が香は
さふは風独今年もうれしき御取立と願ふ所の十方ぐれ
八方金神の中央に座し続ての三四年の災厄もやく解
さも薄氷まちゑ四澤にうるとへふ時をまつのや花
ゐ兄文永堂の引立ある柳川重信画の愛敬で何卒

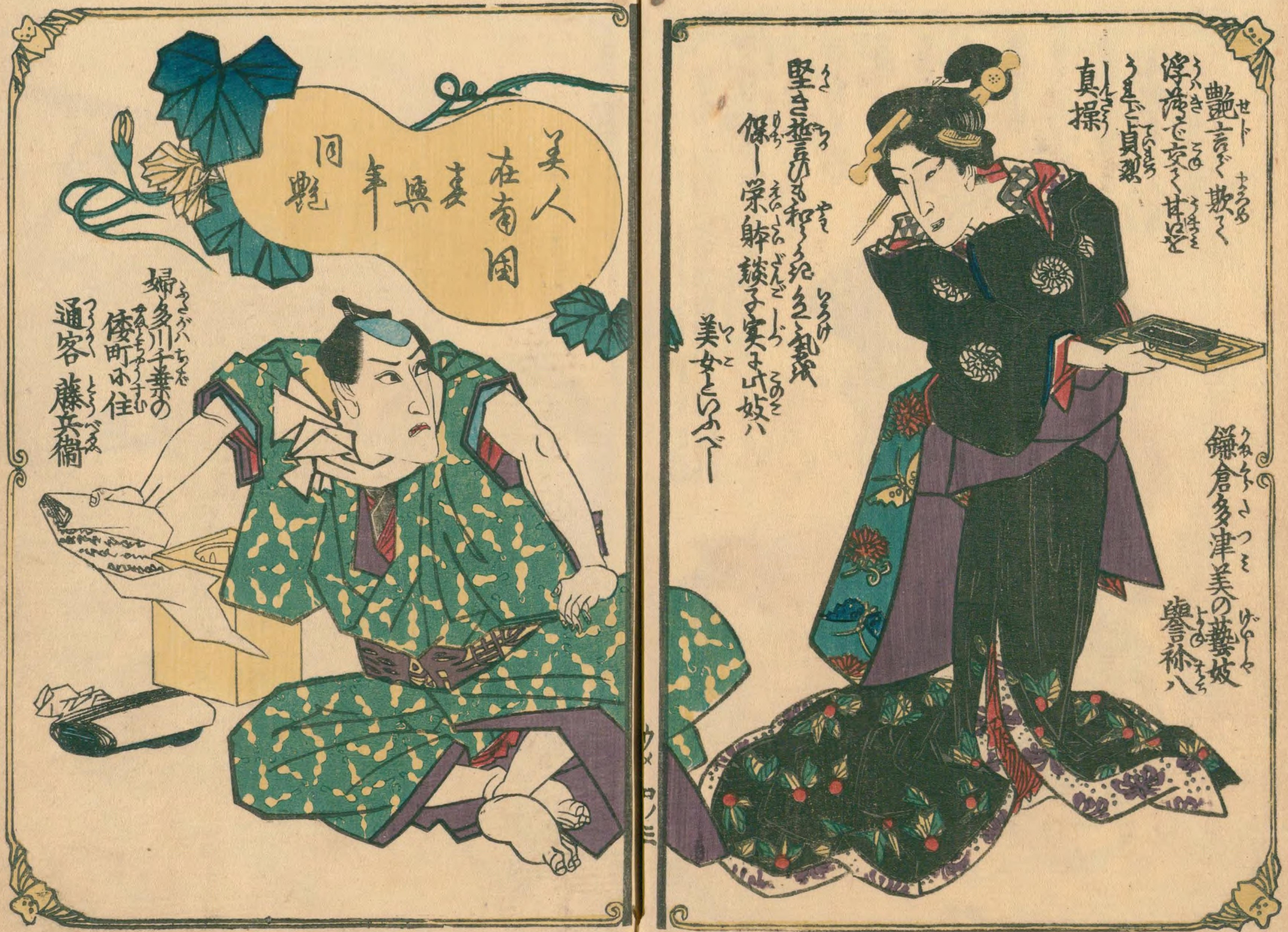
こゝの稗大當日あたりもよき梅が枝を月曜星法
尊が節子供一陽來福の吉書ぞはじめ
干時天保壬辰年春正月に發行なして冬至の
宵子墨みを硯すりうけそ筆を染

江戸前に市隱狂訓亭
爲永春水志るす

抑々和朝に寄浄瑠理の元祖八京都
四条の河原にて六字南無右衛門とよぶ人
女子たゆうをはじめ
都鄙の貴賤を
大寄なさしめ
ことに女子
浄瑠璃
ぞはじめ
みなこの以前に
男女子くぎりをさ
音曲をもつて人寄
せしことはなく
初しとぞ



梅の阿由が義妹 竹長吉



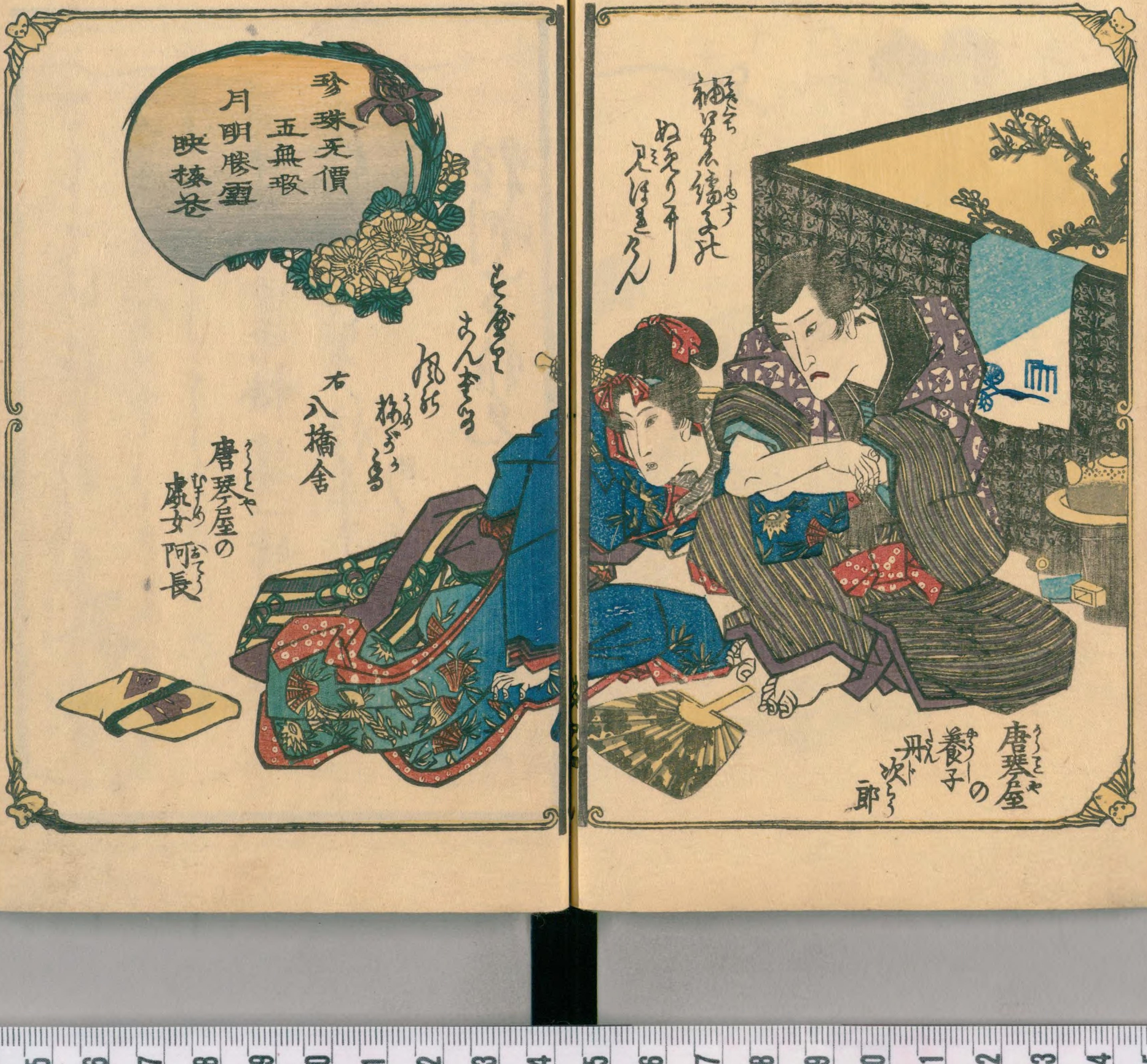
艶言で欺く浮語で交く甘言をうまで貞烈真操

堅き誓ひも和らぐ色の乱れ律し栄躰談子実子此妓ハ美女といふべし

鎌倉多津美の芸妓
誉祢八

美人在南国
妻與年同艶

婦多川千華の倭町ニ住
通客　藤兵衛



珍珠无價
玉無瑕
月明勝雪
映楳花

とし風をまん中にす風折梅がゝる

右 八橋舎

唐琴屋（からことや）の娘（むすめ）阿長（おてう）

袖（そて）は多み縫（ぬ）すみれ
ぬきの別り
見ほしさん

唐琴屋（からことや）の養子（やうし）丹（たん）次郎（じらう）

さらぬだに経もしらぬ梅の香氏
酒上りせ文字のまゝしるも古の手
よりて書しさしあげ侍りぬ
月中仙子雪中梅　第一嫦娥第一香
うれしかりし筆にも嬉しさを
めでたし

狂訓亭雅兄　　清元延津賀

春色梅兒與美巻之一

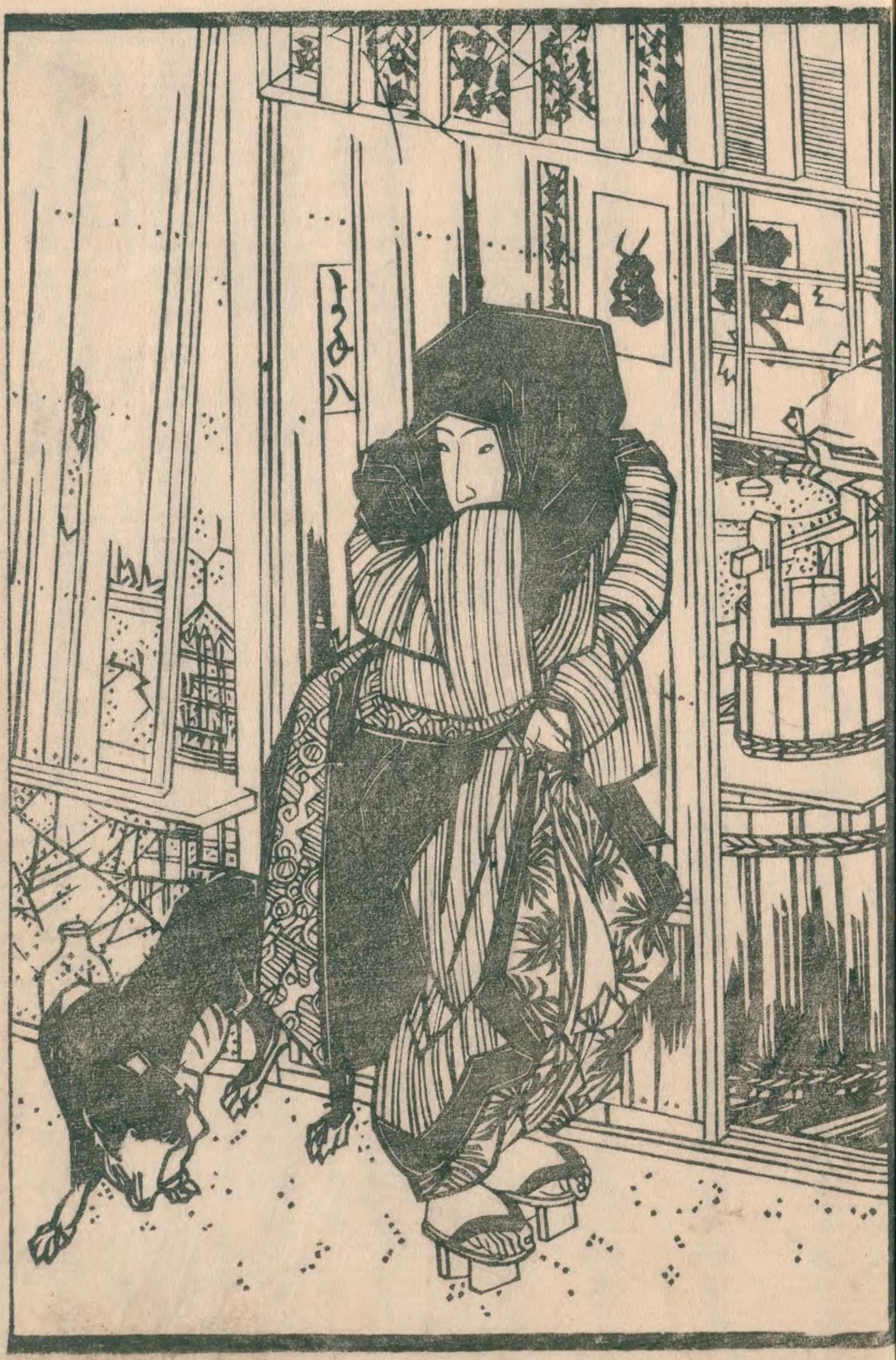
江戸　狂訓亭主人作

第一齣

野に捨た笠に用あり水仙花。それならなくに水仙の霜除ほどなる侘住居柾木の垣も間原なる外田畑の薄氷解てあとなき薄情借家も住ば都にまさるらん。實と實の中の郷家数も少き五六軒中に世帯ごろ家作り萬にとゞかぬ新世帯主は年齢十八九人柄

帝國圖書館藏

賤しからねども薄命なる人ありて貧苦に世をわたる其うへにひとしほ病の床にふし不自由いはん方もなき窮居も其の吉不祥いはず寒けき朝嵐身にしみてところへ顔独りさびしき門の戸を女「すこし御免なさいまし「アイどなたです女「そこにおまへの旦那さんといひつゝあける障子さへ。ゆがむ敷居にがたくとあけて見返る其姿。上田太織の鼠の棒縞。黒の小柳に紫のやたらめの縮緬を鯨帯とし。下着は御納戸の中形縮緬。おこそ頭巾を手に持て。まだ結し髪の嶋田髷。涼しき顔自慢の寝起の化粧つくろはねども美しき。花の笑顔は柳の眉元眞はびつくり魚ちらすなる主「米八じやアねへか。どふして来た。そして隠れて居る所をよく知れたと思ふもふしぎだネエ。マアくこちらへ這入なねト起直りよね「コレちきやア嬉し涙身へ入る思ひで縋ぶるぶるしてそのまゝ息ひつぐ間もくるしさうて苦しいトむねをたゝき咽ひつつくよふなどト寄添ひ背を撫れば



此間(このごろ)はくわきろしやるのさト　づく欠(か)き宅(やど)へ寄(よ)せてくれねへ。マア
色(いろ)のことはそこは末青じヨ。何時(いつ)からかうからいのだへ。丹「十二
十五六日跡(あと)からヨ大造(たいそう)なことでもねへが。どうも気(き)が閉(ふさ)いで
ならねへ。そんならいゝがよふへやア。どふして紛(?)て来(き)たのだ。
聞(きい)てへこともえんとあるト　すこしるいご　ぐるてあれた　米「今朝(けさ)妙見(みやうけん)さま
へ参(まゐ)つたら来(き)たらうつかりそで宅(うち)を出(で)ちやアしヨ宅(やど)にふりぎる
ことさねへ。お前(まへ)お指(?)が此頃(このごろ)お出(いで)で宅といふことはねへによ
夜(よる)も知(し)らるんどうぞ此須(?)頁(?)んでに来(き)て居(ゐ)る声(こゑ)てドツ

子が（逆ばかりやちやゞのことまで／よつやくしこゝまでつり）あつとまわすねへる。その子の宅を聞くまで李祈の方ゞといひまし。そがそまろゝ隣く心得くることを聞く遊んで居ると。其子が宅の近所の娘子する中ぐどふもなへまし。の様子がおまへさんの噂のよふだつた。其晩一所に寝ましてよく〳〵聞てみると宅に居氣な美しいお内室が居ると言ましたゞまじやア。それ違ひないと思つて猶念しく聞てれバ。おまへさんの主よりおくさんの方が年が上の書ぐゝといひまする。やく

おくさんハ。よそへ出て宅に居るのとのこし。聞べききくほどなんだかおまへさんのよふな心持。まうくどふも氣が済ねへから其子によく〳〵私の聞たことを口留して。逢て今日の約束かへりなんでも忘ねよふと思つて。十五日を楽しみまして出来さんであつきまする日頃の念力といふものゝ風としこゝろおまへさんの主家が知れるとのへ妙見さまのおかげで嬉しの本付て氣がくるしるへおくさんがあるとの噂今日ハどふぞ人

お律儀な人　主「ナニつまらねへ。どうして女房（にようぼう）がもてるものか。そして其子（そのこ）ハ何処（どこ）の娘（むすめ）だらうね　よね「なんだか宅（うち）ハ八百屋（やほや）だとおいひやしたヨ。そうかやア　マアいゝじやアありませんか。おまへさんマアそれまでハ。今（いま）だやア私（わちき）のこうんだが思（おも）ひ出（だ）しもあてハ無縁（えん）なるさうやすい子。そして浮気（うわき）なものと、お内儀（かみ）さんのことをよくきぼしもいゝじやアありませんかネ　主「ナニサ苦（く）もざとじやアねへ。此容（このすがた）だものをよくつかりて見るがの。其子（そのこ）の器量（きりやう）しだちでも何（なに）だろう縁（えん）。知（し）れもあるねへ。マアそれぢやア

それと宅（うち）のようすハどうだノ　よね「宅（うち）のようすハ大変（たいへん）サ。鬼（き）番頭（ばんとう）どんの氣（き）じやア。皆（みんな）旦那（だんな）さんとおもつてゝ仏様（ほとけさま）で居（ゐ）るのサ。それまでだ。御内室（おかみさん）の在世（ざいせ）な時（とき）ハあのあまりの理屈（りくつ）だものをどふしてそよりめ杯（?）ふいきますばものゝ。それを何（なに）の角（かど）のと言（いつ）て三月（みつき）にあげずも内証（ないしやう）ハおめが絶（え）やア、おまへさんハ私（わちき）も全躰（ぜんたい）おまへさんの善（よ）しあし（?）悪（わる）しつこと思（おも）つて何人（なにびと）に出（で）まれと思（おも）つて氣（き）をもんで居（ゐ）やしこれまでもぞんもあくいか無駄（むだ）なるだろう。ちがち

みなつく出ざめへと。今日やすやア我慢らしく居されれど。おまへさんの宅ハ知まるし。そしてマアト（[illegible]）ら。此殿なそろ〳〵形男ふるつくあさろしやうのを見てぎよしてあとこの宅ニ居くまするはののか私さとも今日はん。嬉しく此家ニ住んで居ねぼつく。婦妻川へでも如て幸勝しておまへさんの男をおとしも楽みさせやてへ子エト（きんどうア下文の出　男ハきどろくするのである）よね「エヽもうそして書子ニ如しうされ宅ハてアどよしさ話ぐ急ニ身代がたくあつくのであり

すりまヱ 主「さればサ。今さら考へて見りやア。此川ちらの鬼とが先の唐代の松さへところまた今ぐく直ニ戸を塞身上を承知でおまへさ急よふ算子そんなこちらハ露ほくも。這入を見まへバ借金の山も縁つくとなそしてよく思川さ其へ鬼さんにも判をおさせて百両の金も貴所へ仏し。さよそまころ宅へ出入もろつくば音信不通とされさのハさんな此方がふつくる由来まてそのう人ニ養子先の身上ハふんさんして。まず後日ハこまらざあるを言て着

此松兵衛が畠山さまへ出してある五百両との證文ハ
おまへに上げた其代ハ自分散財で残りの百両ハ私が七
十両出した外の者へつかハしましたといつて其身ハ上方へ
登るといつて行かれまして、二番だん〳〵此久八といふ者が
信切にあなたが名代に畠山さまへ行てくれましたが随分金子
ハ下げつかハさず、此久八に松兵衛にかけあひつけられまして残
月の此未入此様のそのうへで、おくらひ
梶原家へ千五百両に納まりしところ夏井丹次郎より
さしあげおいてある五百両をさし出し際のところ千両ハ早速
上納いたせといはれてびつくりした久八、相談さいはい中屋
敷へ帰り久八が宅へ役人衆がござつて屋敷の奥へ直
立帰りてかづかずにあつらへた夏井の家の分散とあきまで
申しつけるに千両入の金子松兵衛より出して当主人丹
次郎同様にいたせし大切の金を持ちて久八が手へうけとりて。
あまりの世話もあの身のたく松兵衛ハ取り出しましたら
惣じて久八が難儀するそのでござりいますのであまります

くやしい顔をきてこじやァねへか　よね「ナニヱ不聞もんか
ねへ。そしてごまがお母さんの病氣の世話をするもとヨ
主「ナニ世話といつても居付く世話のしてもねへが長屋の
衆やすくおもふ世話するのハ今するもしく久八とかいふ
人のおかみさんの姉が女髪結をして此近所に居るから。
その姉が時々来て内の事をしてくれるのサ　よね「そうかへ
其女中といふ人　主「女中といふハ何のことだ　よね「なんでも
なのゝヱぞも氣になるねへ　主「あまりそんなに浮氣な海

性じやァねへか。よそごとをして居てもおめへア実に仔細イヨト
よね「アヽ旦那へまぜそんなに悲しいことをお言なさる
の。ぞ是迄の斯しておまへ家が知れるくらゐハぞんなことと
さても私が男のおよぶだけハおまへさんに不自由ハさせ
やァしませんから氣を長く持て早く能なつてく
おくれなさいヨ。こんな淋しい所に夜も独りでマアさぞト実
をそむけて袖をあて昔といへど遠からぬ昨日ハかゝる
此のごとくたとへ内縁ハ兎も角も大町小万世の旦那

ガラス使用

所（ところ）がらとて何程（なにほど）も。袖（そで）の哀（あはれ）に苦（く）ろうせし其人（そのひと）が三道地（さんだうじき）をこま。

習（なら）の道（みち）がつてで二筋（ふたすぢ）さる仮（かり）にも人（ひと）はさすがに妙（えだ）な風（ふう）の傾（こきさけ）居（ゐ）る。おまへの世（よ）にある男（をとこ）の心（こころ）、添（そ）はれて見（み）る女（をんな）の心（こころ）ハ千万無量（せんまんむりやう）のうちの案事（あんじ）。なぞ目（め）に見（み）えぬ歌（うた）きかす男（をとこ）ハあるまじき

主「何（なに）サおめへらア斯（かう）して人（ひと）に遠慮（ゑんりよ）をしてゐる身（み）ぶんだから不自由（ふじゆう）も何（なに）もあるこたアねへ。どふも自由（じゆう）にならねへ身（み）の上（うへ）だから

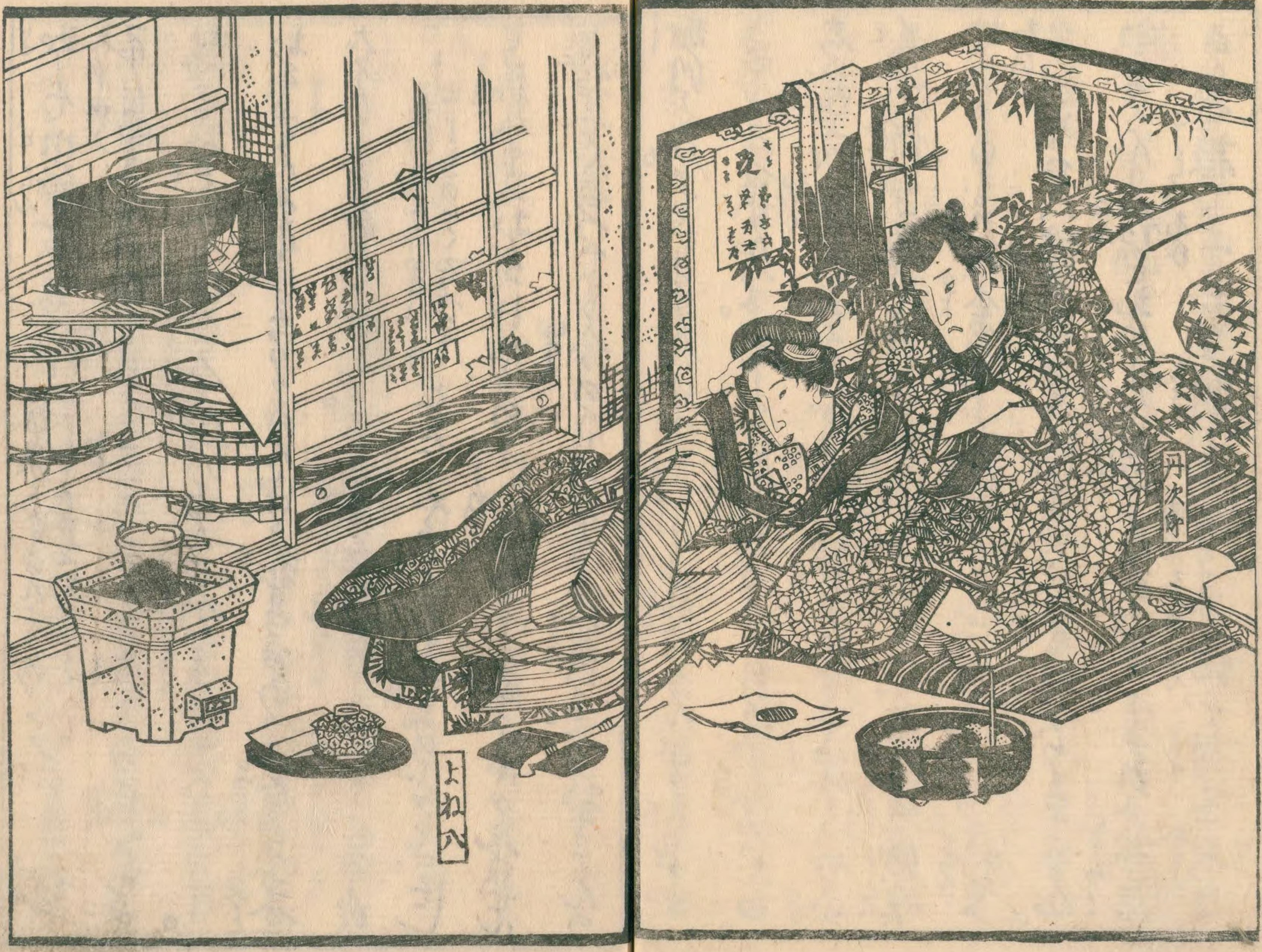
よね「サアそれまでだから、モウこふして顔（かほ）を見（み）てあるまやせんヨ

主「そんなこと言（い）はねへで。どふかして身（み）を全（まつた）くせんと。そしてキツウおそくなるどころへいくよ

よね「ナニ今朝（けさ）ハおそくなつた用心（ようじん）をして来（き）ましたヨ。奥座敷（おくざしき）の二階（にかい）ちくざうたとりかハしてしまふ。宅（たく）の手前（てまへ）や向（むか）ふのお客（きやく）のおまへさんその人（ひと）の事（こと）やくの徳（とく）さんの手紙（てがみ）まで此（この）まゝよ。ふうく（うらて）蔵（くら）とやすハし変（へん）、まで豆（まめ）ぎく引（ひ）いて見（み）るつもりで夜（よ）ざく来（き）て此（この）ころ（とろ）。今日（こんにち）みんなゆるしてあの人（ひと）を世話（せわ）ぶよねヨ。そして観音（くわんのん）さんと浅草（あさくさ）きんへお百度（ひやくど）をして願（ぐわん）をかけるつもりでごろう。陽（よう）ぶどうまでまとめるとぎがお門（もん）でもいくよふすればしてありやすヨヨやみ

一ツもないねへト（いひながら火うちばこをさがし　やう〳〵に火をおこし）薬を煎じて間て上ようとの土瓶が見え。主「その火鉢の側にあるヨト（いひながら　まちかねて　のくすりを　出しく）生姜もそのなべのうへにあるだらう　よね「アイあり。まアヨコや此口のうけと主びん久へト（おのれがたびコとらひ　がやくとる　あくもありやど思うるをさう）あらくい（ふさいだ）お医者さんハ何所のだへ　主「ナニそれともお淡さんが世話をしてよこしたのだ　よね「おまへさんとハヱ　主「いまにすみしちや久八のかみさんの姉よ　おまへと同見の子の言たかみさんとハその上だらうへそれハいくがおのくの言を

新川に居てハコラ〳〵いのへ　よね「十六七は吉原のきが付き是が甚せん八子。そして此八あのきやうハへ　主「ムヽおめ名八かのべ向のおそさんが来て勢くて参てさうらいが。ほめへ種ご座くてらくうが此手紙つハよほも番頭人せらうめのもねへ金が事ど遠いのことある　よね「ナニ利やら手紙までハ姑様ぐ言てどで何も喰もしねへが。おまへさんに何でもおいしい物でも食させてやりと私がなんぞ拵て上ようと思ひ斯して居る中何ぞ用を思ひ


丹次郎
よね八

坐て胴乱なねへト（いひながらこのれより何／つまミしもののをかけざしく）マア是で何ぞ

不自由なものを買てく。そして男にする物を持ちょ

たべくおかんなさいよ。今的八丈の縞ありでハあるし。

おまへさんにあげまするんだから新造なのゝ宝に金

なりしゃありやせんヨヲと其内談合して出て来けれ

ヨト（是ハモウ其はゞ男ハ気をいけ／ともまきのさくそうつま）とらじやアどふも気のどくだネ。

て米八のみおめへけへるのかよ　よね「十二やくと股アそア為なせん

よ。おそくなつても今の所げざいらぬ宝子マアお前さんの

首りがひどくわるとしそうでねへそうと来ねくあげ

ようくそふしたら所持がちつくらさらぽうなきするぞらん

主「そふヨすご居ても能アそろくとさらしてくんなナ

よね「アい主」ト（うれしさうにそのおもひを／うましそのまゝ）私のさし櫛でもようらの子ア

ヨ宮さまておそろしいれトんよかきハ女の嗜る越方を

思ひ出し悠然ゑ心で拾元へひのやう落る涙の雫

男ハ根向き　主「よね八ななぜ泣　よね「ぞ主でもでも　主「それ

だつてもぎよしと　よね「主のそんなアるなぜとんるのふたつねへ

荷のうへはゐるのさへしらねへト（おとこはなにかはなしあふ／おとこハふさぎむきよね八が）（くびをとり／ひきよせ）主「うんうんして居るヨ　よね「なぜあやまるのだヨ　主「手めへにはまアで悲しい思ひをさせるから　よね「ヱヽもう　おまへさんハ私をそれほど思つてお呉なさるのかへ　主「うそい　そふコト（ぢつとせまれバよね八ハあどけなく／丹さんのひざへよりそひ顔をそ）どふぞ　主「どふぞとハ　よね「かうしていつまでも居たいねへ　ト（いへバ男もつくづくと見直せバ思へバ／うれしきさまがなうれしかり）　主「アヽ志まつてへのホトひつたり寄添　よね「アレくすぐつていヨ　主「ホイ堪忍しなト

横に倒るゝ此ときにほのかに観世音の巳の鐘ボヲンく

第二齣

遠くて近きハ男女の中とハ清女が筆の妙なるかな哉　丹次郎と米八ハ色の楽屋住ゐゝいつしか契りし　かね言をたがへぬこゝろの頼母しく誠ねて浮世の中の　今九尺二間の破るゝ病の床に寐ても離れぬ縁しきこ　ちる恨み涙の玉の一し捨く身も貧苦をいとハぬ恥ちかに　末と恋の慾とまで流るゝ里にある人の意地とハ知られ

けつく（主丹次郎ハ みがまへから）丹「米八その茶を茶碗へついでくんな。胸がどきどきするから（よねハさしぐんで男の顔をうちまもり）よね「ヲヤそれハ気がかりなねトびつくりして薬を持来る 丹「何サ何でもねへがト つくとり よね「コウ気ざまをきかしてこねへト（とりまはす）丹「そうまやアそふコまらふ ヱヽノお長ハどふしたのふ よね「お長さんかへあのこも実に苦労するのさヨ。そしたふ鬼兵衛どんが何かおくしらしいそでうら猫なでうひしてみるのさ。随分わちきも側で気を付てみやアけれども何をいふにもおまへさんのことが八

うんうつく居る（とかくなるよハすぐなやう あくあるものぞくどろう）あのどうらう実ニ志みるふござ（いやのさうる）丹「そふサあれも幼年からあのよふに育合もうりひそふだヨト すこし よね「さうよふサ子。おきる列にハ猿別うるのくそよどうく吃ふでござい升ヨト つくと 丹「やれ何さ別よくハいくといふのでハねへハな。マアうまいそふだといふこたヨ よね「そりやアごうく無理だしハ言やアしやせんハ子ト すこし めじら（をあげてうらめしき すがたうる）丹「すねけめへ実ニ彼アいろいろ何でも御存女アしれへ よね「きよふサ私ア子抜サ。お長さんといふ実ニ

ガラス使用

しく気づけのあるおまへさんゆゑ。さんざん苦労(くらう)するやうな間抜(まぬけ)の生真面目(いきまじめ)であるまいものサ　丹「よくいろ〳〵なことをいふヨ。そんなことがどふでも腕(うで)自慢にするト（よねをむく）　よね「ヲヤおまへさんハ遠慮(ゑんりよ)がなくておいとの人へ　丹「遠慮(ゑんりよ)をしてもしてねへでもお猪でおくがいゝ　よね「それまでどうでもいゝサ　おまへさんがお長(てう)さんのことをよく思ふのと言(いひ)ごとがつゝそれがいつさんでもあつまりますね　丹「ナニあのうがそふいふあのうちのつでハねへがさゐぞと言(いつ)てくんど　よね「ヲヤがらうへもうちのう〳〵もうちハそうでも同(おな)じさネ

おまへはせんうへ。そんなら私(わちき)がつまらないから悋気(りんき)してお くんなさいナ　丹「ぞれでもいかねへト（いかへそのをもやうことこをみて男／いよろくなるがあきまあのそぶつも）　さまをへつと（ゐるやうだから）　よね「アレサそんなことをいふと私(わちき)がつまらないからどうぞ悋気(りんき)　思ふく機嫌(きげん)を直(なを)してお長をさんのなト（おもつくする）丹「それ（みつともつとつきらひ）なく悋気(りんき)するが定(よよ)おさそくなつてこそよつらおまへさんと二人で業(おん)じずと宅(うち)へ帰(かへ)つて座敷(ざしき)に坐(すわ)るのを勧(すゝ)めるヨト起(おき)（ことまでおねいのつそいのうちでつまことをがあるのでとるぐに／ゆみつくうちでさ嫌はおへろがさんて行の支度）　よね「モウ今頃(こんごろ)は兄さんおまへさんが。そんなおかあさんへしく言(いつ)て呉(くれ)さへしやりやすと猪(よね)のことと

飢るのが嫌になりますならば幾度もモウどんなことがあつても変る心を出しておくんなさいますなヨ　丹「何だ〴〵ばかろ。めへ

よね「コレちきやアそれまでぞろ〳〵の筆しらまでてなるのヨ。斯して居さへしつてもどうぞ時節には私のことを思ひ出してお呉なさいヨト　あどけなきことをまで言ひ

〽忘れねばこそ思ひ出さず候とは名妓高尾が金言。なかゞら互に思ひ思もふて深き中でも愚痴になるまじ。かしまるまでもときにはあるまじや恋男をつまらなく。

ことあらんかと幾度か思ひ過しも恋の癖其身になりねばなか〳〵に他目に見えぬいぢらしく阿房らしくもまた愚らしく第一は実に哀れなるぞ言までも知られぬ人といふべし

丹「思ひ出す所。忘れる間があるものか　よね「それでもアノお長さんのことを思ひ出しちやア厭だヨト　おとなの艶なる　丹「なぜだつて言てみなほども飢るもの度を志す　よね「何の縁もなくてもあるまいしそのゝ着物を撰択だろうがへ子。それじやア寝よ

何も用ハおざりませんのさ。ツイノ子ねがやくそくするまで不自
由なのがあるからどうぞして便をよこしてお呼なさいヨ。
是非コちきやア得る入するところ。そのするをまくこどよ
でも出来るものか案じずと御出なさいヨ。おかしい胸の法
もありますヨト（よねぶしさを からかひける） 丹「まことめつたる業をは仕業
あく後へも前へも引れ入ようなことをして居るヨ よね「だが
おめへどうなさんなよ。どふも騎郎だせ川で所ですもねへ悪
法も出ませんかならず男を雑ぶしても 丹「米八やい

本来悟しを開して居るヨ（よね八ハちうちうちがやくそうなり） よね「おまへさんだって
名顔をしてお呼なさるのだもの。（さんとりのをさんとのいさるものを ちうちうのすべてのくさいさうしさうだ）
ちきさやア稲荷の残川さ飯くはさるのハねへトよく 丹「なんだ
わがそくさつきしよふも解しともねへよふじやアおよしても
飯くらアさるのおへのウト（いふさそ男のこゝろおりひやらやどりくるしく） よね「お
そのことふとふに里ろう直に楽 丹「ナニそれじやアコウヲおそよする
正鬼さへがるつく。すべよくくらがへをさせるところじやア
サウ機嫌よくして飯なるヨ米八。 よね「そんなこれねへだんる

こゝでおまへさんに悋気(りんき)をうける　よふなことがあつたら

ちやアころりとのろい気(き)を起(おこ)して取(と)りますはね　丹「ヱヽよ

なんでもすべよく出(で)るやうにして　素振(ふり)をとをもして手(て)めへ

の身(み)にもつたいないことをでもあ門(かど)と時(とき)ハなんでもおれがちかく

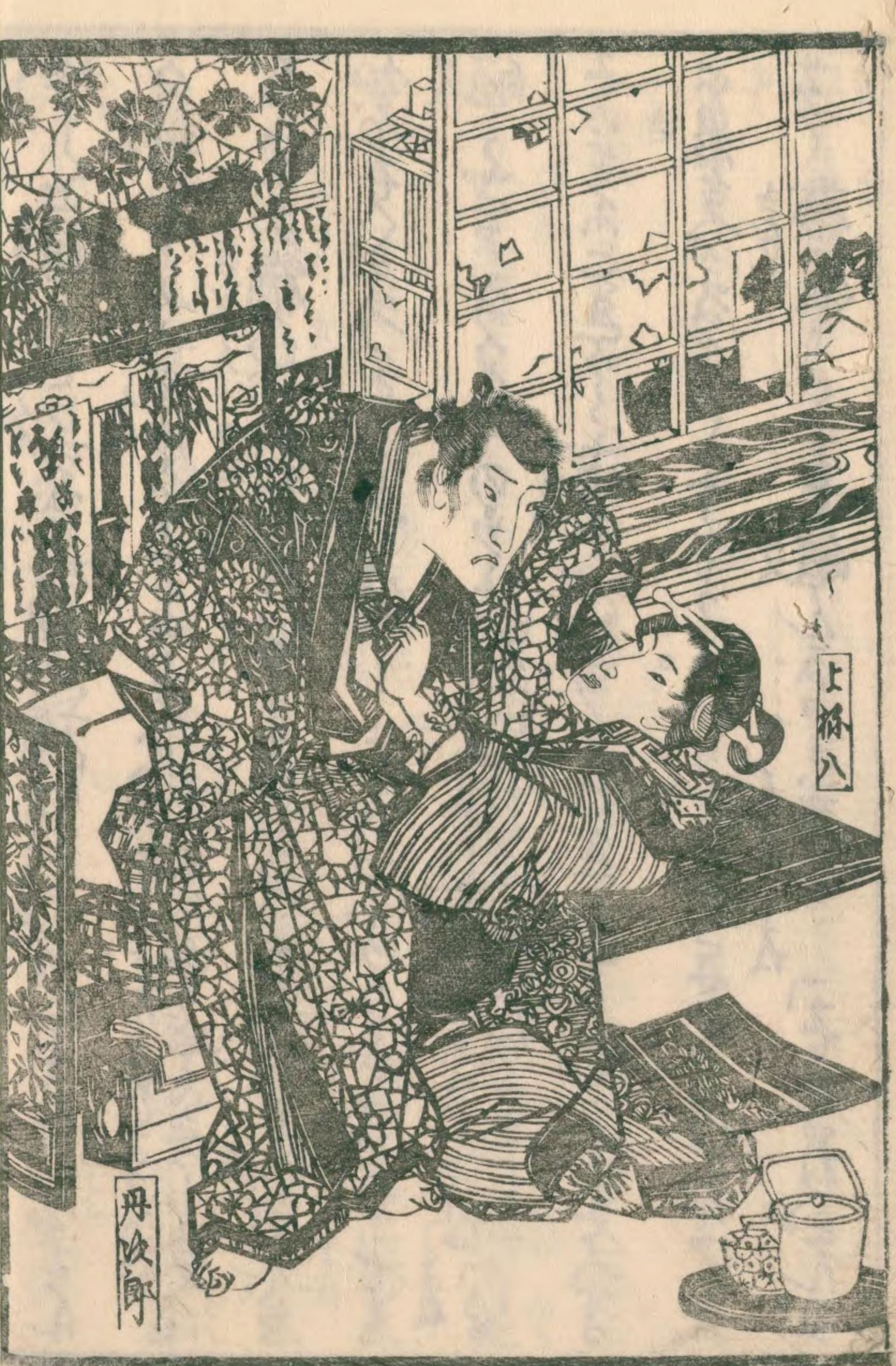
がれへう。どふぞ貴様(おまへ)を思(おも)つて呉(くれ)るなら。ひとの度胸(どきやう)ハ

ちうどうもちらをまへてぜんゆくきものちぐすることを

度胸(どきやう)とのゆくそこらきまゝつけ　ほだへがのョ　米(よね)「アイ

口説(くど)いて　おまへさんの為(ため)にすることでどうぞどふ門でもお

りよのあく二人(ふたり)が身(み)を門(かど)で来(き)れつまずるからハ度胸(どきやう)ハおや



あのせんくろ業(ごふ)じれつたい何(なん)とも早(はや)く能(よく)分(わか)つておくんなさ

きいヨそんなら松(まつ)ちやア宮(みや)迄(まで)行(いき)ますはヨト（言(いひ)くとしてうちあがりつましがあがらうのを見(み)あけと見(み)えなるがぬ）よね「急度(きつと)でござりやすよ 丹「何(なに)を云(いふ)急度(きつと)ざ よね「一寸(ちよつと)の気(き)を出(だ)しはとんだやつこさ 丹「ムヽヨ承知(しようち)ごつてまう

道(みち)よりをしねへで帰(けへ)んなヨ よね「上途中(とちう)寄(より)をする所(ところ)がありますものか 丹「そして先刻(さつき)の手紙(てがみ)をまだお前(まへ)へ書(かい)ておへ読(よ)んで見(み)るのじやアねへか。どうでもまはず読(よ)んで見(み)らよ

よね「アイそれハどうだけれどもじやアそうしてお呉(くれ)なさいはヨ。よく気(き)が付(つい)て呉(くれ)さしつてねト（あつて下(か)ちて〇ゆきすぎしのきつくれさ／こゝをすぎし〇あさきやまきしちのくづひ）（これまで思(おも)ひの／こゝにちやあり）よね「いつまで居(ゐ)ても限(かぎ)りハねへからもう〇思(おも)ひのきつく往(いき)ますはとト（あがり口(ぐち)へ出(で)てきすゝむのを／おく丹次(たんじ)ハあとよりいで）丹「アコウ米八 よね「アイ 丹「ろくまで用(よう)がある事(こと)じやけ。イヤいく／＼急(いそい)で行(いき)なヨ よね「アイそんならト（なごりおしげに見(み)かへりつゝ出(いで)て行(ゆく)そのうしろ／かげを丹次ハ見(み)おくりながらひとりごと）丹「うゝんそれでもあんなに苦労(くらう)させるのも何(なん)の因果(いんぐわ)だらうト。

有(あり)がてへア眠(ねむ)くなつてきたぜト（あくびの上ホ／すくりーが）ホイと言(いふ)ハ去年(きよねん)。巾着(きんちやく)をコレを置(おい)ていつたアとあるぢやアらいさまぐれハいゝくある

アおまへが久しくいつまでも貞女をとりつくが恋でゐてへト　丹次郎を手前で
ろうく　よね「紺屋形へ　丹「ヲイ米八つ　よね「此き頭巾を
しそる
落しそ　丹「いまおめへもそう思つてまごつかく居るが不と
だト　丹次郎を仇なまでいつて　よね「あんどう出来る敷のようなら
來まで性これまで何にそして頭巾はなくてもいいけれ
ども　丹「いくら見てもどよーしと　よね「やつと唐渡り頭りよく
きつとものを　丹次郎も笑つて　丹「そんなこといつちやア悪く
頭巾なるヨ　よね「これこそ実に頭るヨト　おのが心きつと思へてひろ

ア勝く様女だト　二人はひつたりとよりそひつゝ　なきつくが二人の心こそ
あまりど　一　豆腐やぁ　ーイ
悪口智なる事は似て見れどもすべてその人の身にならずんば。
作者に知られぬ恋の仇此ものはまことにいかなる事も実に
同じ男女の情を甘ひの思案の外とも。物の哀を
知りぞ。寄らば妬見の四つまとして知る人ぞ一筋
こなろんろ。

春色梅ごよ美　巻の二了

老婆心人
狂訓筆記

207
60
2829